

Title	中国湖北省農村における宗族・家族・隣人関係の民族誌 一漢族農民の「親族関係」を問い直す
Author(s)	賈, 玉龍
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/76342
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (賈 玉 龍)

論文題名

中国湖北省農村における宗族・家族・隣人関係の民族誌
—漢族農民の「親族関係」を問い直す

論文内容の要旨

1978年以降人民公社が解体され生産請負制が導入されたことに伴い、中国の農村では農業技術の進歩と農業機器の改良が急速に進み、農村労働力の余剰化が顕著となった。また、農村から都市への労働力流動を抑制する政策が、1985年以降徐々に撤廃されるようになった。2000年代になると、中国は経済発展により都市での労働力不足が深刻化し、農村の青壮年層がこれまでにない規模で都市に流入するようになった。

本論文は、中国湖北省随州市の漢族村落「楊家寨」での現地調査をもとに、出稼ぎ労働者を送り出す母村社会の実態を記述・分析する民族誌的研究である。その目的は、農民たちの人間関係がどのような相互行為によって維持あるいは切断されるのか、を明らかにすることである。従来の漢族研究で関心を集めた宗族・家族のほかに、本論文では日々の関わりを通して築かれる隣人関係を視野に入れることによって、組織・制度と父系親族に注目しがちな漢族親族研究に新たな視点を加えることを試みる。

序章では、日常生活と隣人関係に関心を持つように至ったフィールドワーク経験を述べ、本論文の目的と構成を確認する。

第一章「父系出自を中心とする漢族親族研究」では、本論文全体の分析視座を提示することを目的として、漢族親族研究の研究史と近年の親族研究の動向を整理した。前半部では、宗族を中心とする漢族親族研究の研究史を概観し、「日常生活の看過」と「生物的關係（宗親）と社会的關係（姻戚・友人など）を対置する傾向」という問題点を指摘した。これらの問題点を解決するために、後半部では「自然/文化」の二項対立を乗り越えようとする近年の親族研究の動向と中国研究における「つながり（relatedness）」概念の有効性を確認し、「親族関係」を相互行為によって構築される関係性として捉えるという分析視座を提示した。続く第二章「調査地概要」では、調査地である随州地域と楊家寨の基礎情報を紹介し、フィールドワークの概要を述べた。

第三章「宗族の幻:宗族復興における〈続〉と〈断〉の力学」では、無形文化遺産に登録されている炎帝祭典と農村地域における宗族復興の関連性について検討した。中華民国建国以前の反清運動に形成された「炎黄子孫」の言説は、1990年代初頭から国外の華人・華僑及び香港・マカオ・台湾の人々との連帯感を強めるために再び展開されるようになった。第三章の前半部では、父系出自を中心とする宗族文化が炎帝祭典とともに国家から正当性を獲得し、農村地域まで浸透していると指摘した。後半部では、楊家寨の楊氏宗族の族譜再編に焦点を当てて、「中心」に位置付けられた「宗族エリート」と「周縁化」された「農民・出稼ぎ労働者」の様子を描き出した。これを踏まえ、宗族の「つながり」は血縁を基本とする本質的な関係性ではなく、義務遂行の成否によって維持/切断できる構築的な関係性であると論じた。

第四章「遠距離家族の生活戦略:共食と世代間義務から見る家族の『つながり』」では、出稼ぎ労働者を送り出す母村社会における家族のあり方に注目した。楊家寨では、青壮年層の都市進出と子供の通学により、日常的に同居共住できない遠距離家族がいることが常態化している。第四章の前半部では、春節と端午節における非日常的な共食と儀礼食（「三鮮」）の共有が、「家(jia)」のメンバーシップを再確認するとともに、感情の面で家族の「つながり」を強化していることが明らかとなった。後半部では、楊家寨における一連の家族史から、世代間義務（「養」）の遂行によって維持される親子関係の構築的な側面を確認し、都市と農村の不平等性が伝統的な世代間の義務・権利関係に影響を与えていることを指摘した。

第五章「日常生活における隣人関係:生産と閑暇から見る非境界的集合」では隣人関係のあり方に焦点を当てる。第五章の前半部では、農繁期の日常から、農業生産は家族を単位に進められること、そして農業生産をめぐる情報の流通は隣人間の「お喋り」を媒介に成立することを確認した。楊家寨において、生産活動以外のあらゆる活動は「玩(wan)」のカテゴリーに分類可能であり、その中で最も代表的なのがお喋りと麻雀である。後半部では、農閑期の日常から、お喋りグループには農業生産をめぐる情報交換という合理的な側面のほかに、同じ立場（農村、老年）からの共感を獲得するという情緒的な側面もあることを明らかにした。また、臨機応変に形成されたお喋りグループや麻雀グループの根底にあるのは、実践レベルの「共通性」をもとにする暗黙のルール（「構え」をめぐる共通認識）であると論じた。

終章では、以上の各章における議論を総括し、漢族農民の「親族関係」をめぐる総合的な考察を行った。すなわち、本論文で取り上げた宗族・家族・隣人関係の「つながり」は、いずれも相互行為によって維持・強化できる構築的な関係性である。また、中国という複合社会において、「都市-農村」関係をはじめとする構造的な権力関係は「親族関係」の構築に無視できない影響を与えている。最後に、以上の内容を踏まえ、農村出身者が自分の農地の使用権を委託した農業会社に賃金労働者として雇用され、故郷の村で老後を過ごすというのが、想定しうる近未来の農村像であるという展望を示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (賈 玉 龍)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 栗本 英世
	副 査 教 授 白川 千尋
	副 査 教 授 森田 敦郎

論文審査の結果の要旨

20世紀の前半に、社会／文化人類学で展開された父系出自集団（英語では、クランやリネージと呼ばれる。日本語では氏族）の分析モデルは、主としてサブ・サハラアフリカの諸社会に関する民族誌的研究に基づいていたが、その後世界各地の社会に適用されていった。中国の漢族社会の研究に、父系出自集団（中国語では宗族と呼ばれる）のモデルを移植したのは、イギリスの社会人類学者、モーリス・フリードマンであった。1950年代から60年代にかけて発表された彼の研究成果は、その後の中国研究に大きな影響を及ぼすことになった。つまり、漢族社会の民族誌的研究は、宗族を焦点として展開することになった。1980年代以降の改革開放の時代には、それは現代的文脈のもとでの宗族の「復興」や「再創造」という新たな研究テーマのもとで取り組まれた。

2016年8月に実施した予備調査を経て、2017年5月から湖北省の農村で本格的なフィールドワークを開始した賈玉龍は、以上のような漢族社会の人類学的研究の「伝統」を踏まえ、宗族を中心的なテーマに据えていた。宗族の構造や機能、そしてその現代的変容について調査するはずであった。フィールドに滞在しはじめてすぐに判明したのは、村人の日常生活において、そして非日常的な儀礼等の文脈においても、宗族はさほど重要ではないという「想定外の事態」であった。博士学位申請論文『中国湖北省農村における宗族・家族・隣人関係の民族誌——漢族農民の「親族関係」を問い直す』において賈が従事した学術的探究は、まさにこの想定外の事態を出発点かつ帰着点にしている。宗族が重要でないとしたら、村人たちの日常・非日常の生活にとって意味のある社会関係とはいったいなか。そこで賈がフィールドでの経験に基づき注目したのが、家族、親族、近隣であった。その結果、急速な経済発展のもとで、若者や壮年の世代が都市に移動し過疎化する農村社会において、村人たちがいかに「つながり」を再編、再構築し、生活を維持しているのかを活写するとともに深く分析した、優れた「新しい漢族社会の民族誌」が誕生することとなったのであった。

本論文は、序章と5つの章、および終章から構成されている。序章では「想定外の事態」を含むフィールドワークの経緯が述べられた後、本論文の目的と構成が論じられている。続く第1章は、父系出自を中心とする従来の漢族親族研究の批判的レビューに充てられており、漢族研究以外の近年の親族研究の成果にも目配りが十分に行き届いている。第2章で調査地の概要が詳述された後、第3章では、現代の政治・経済的文脈における宗族の「復興」が論じられている。要点は、政府や共産党の利害関心と、村人のそれとの間に存在するおおきなズレである。第4章と第5章は、本論文の中核となる部分である。第4章では、「共食」という実践、とりわけ旧正月に各家庭で料理される特別な食品に注目し、その分配の範囲と社会的意味合いを分析するとともに、「養う」という民俗概念を鍵として隣接世代間と互隔世代間の家族関係のサイクルを考察している。第5章では、農作業の機械化の結果増大した余暇の時間の使い方とそこにおける人びとの「つながり」に注目する。主要な余暇の使い方は、「お喋り」と「麻雀」である。それぞれの場で人びとの集まりがいかに形成されるか、なにが話題になっているのかが、実証的な資料に基づいて詳細に記述され分析されている。終章では、こうした農村社会の持続可能性について考察されている。

著者賈玉龍は、中国の東北地方、黒竜江省で生まれ育った中国人（漢族）である。その意味で、本論文は「現地人である人類学者が自分の国で、自分と同じ民族について調査研究した成果」と位置付けることができる。しかし、同じ漢族とはいえ、賈の故郷と、調査地である湖北省とのあいだには、自然環境、生業の形態、生活習慣、そして言語のうえで、おおきな相違があった。つまり、賈にとって調査地はいわば「異郷」であった。また、調査者

が村人の信頼を得るには、かなりの時間と努力を要した。現地人類学者が自国で行う調査」が、一般に想像されるような容易なものではないことがよくわかることは、本論文の重要な意義のひとつである。

本論文は、関連する文献の十分なレビューと、丸1年に及んだフィールドワークで収集した豊富な一次資料に基づく、優れた研究である。とりわけ、家族・親族・近隣の「つながり」に留意しつつ、農民の一日と一年の過ごし方を明らかにした詳細な一次資料は貴重であり、豊富な民族誌的資料が明確な枠組みのなかで提示されているため読み応えがある。本論文は、人民公社解体後、高度経済成長のもとで過疎化する、現代中国の農村における日常生活と人びとの社会関係の変容と再編のあり方を、生き生きと記述しつつ深い分析をおこなった、新しい民族誌であると高く評価できる。本論文は、父系出自集団モデルに基づく宗族研究という従来の枠組みを乗り越え、固定的な集団に依拠するのではなく、臨機応変に形成される流動的な集まりに注目した、新しい漢族社会の研究である。それは、湖北省・中国という空間的な限定を越えて、人間同士のつながりに関する人類学的研究の進展にも貢献するものと考えられる。

以上の理由から、本論文『中国湖北省農村における宗族・家族・隣人関係の民族誌——漢族農民の「親族関係」を問い直す』は博士の学位（人間科学）を授与するのにふさわしいと判断した。